

に達したものであった。ところが日大斗争の爆発と、東大
斗争の高揚を契機に、もつと五の大家路線と精神主義
が一定の自覚性を獲得したのに気づき、68年8月明使
に多ハトとの縁を切り、マルクス・レーニン主義者同盟を
ボツキ上げた。(この内訳をみるに、このもつと五路線への
批判の過程で対面し、「派が何の体系的な根拠にもたてられ
ていない」という、一部学生連帯による諷刺的批評と同じ「派
としての自覚性なきものをもつと五人と視てくればならぬ。い
— 対面し、「派根拠紙『赤光』」などのあつた「同盟の根
拠紙」にわたる意見を—)

そして、「同盟」の中心に所切青年解放戦線、農工解放戦
線(三里塚を中心に存在するがまた組織的に存在しな
いらしい)、青年解放戦線(9月号、全国50以上の組織
を網羅)、一里塚斗争以時、パソナと近鉄を闘化
したタクローニ中核派、赤黒派とともに青年学生主義者の
共闘した、10・21斗争からの非暴力大団し闘争につ
て、「日本成を時闘しているが、彼らの「同盟」は「今
日」の旗である

(2) 「日本成」論の対峙とその反面的本質

ひまず、彼らは戦前の権威と「トナリ反革命」のための
「自任隊による国家後自主的任をかりかちこつて行われ
る反革命」をめぐり、「佐上論米」を行われかちこ
つていふが、それは「世に響きに象体制の徹底的強化
」によるのみならず、帰結するものである。(以下、引
用はすべて『赤光』の「日」の旗を初米組と謂由成
く)あり)

そして、10・21斗争の教訓を、「10月斗争から革命連切
は戦後全下における世情の成府を懸念する新たな任務を革
命派に課し、マルクスレーニンの「戦後体制」という「暴
力」の根拠を愛敬する人民大家の自覚反式、武装斗争が……
東大に投する闘争にわたった」とし、「戦前隊を象根にせ
せ、打ちぬいた」が「かつ、同野は火の三果にあらた、
一つは「大家の自覚反と音楽として文書通り戦後隊を象
根、新母する闘争の本質、護衛軍技術上の不備はあり、も
う一つは、戦大の、とりわけ全共斗大家を組織的に初置し
たの自覚反と「全」の本質反として成府にわたった象
根である。

このように見てくれば、「各隊別、再建解放」は
「階級主義共闘性——三層権力創出と反共闘争の成
府」を「象根」として、次の対峙の針を懸念し、

現在、「戦後体制」にわたる革命連切に備わつてあ
るマルクス主義体制を象根的に解任しつゝあり、「戦前
級……暴力的支配と戦後体制をマルクス体制に取
りかへるべき」といふことがあり、「戦後体制の民主主義的表
現の象根的根拠」と「戦前級……暴力的支配と戦時によ
る一切の象根物」を取りかへるべき、「マルクスレーニ主義者
を創出する終りに、革命的反抗の世に開始する」とい
ふのである。

すなわち、かかる「東大斗争」「赤黒」「日本タク
ローニ」の階級自覚を根拠し、……自然主義的の旗を
が、今マル階級を解任し……全人民の革命が、区革命が
と同じ、中国の象根反と全共闘とし、「本」に「社会に象
根

(次巻へ)